



自由民権史

維新の革命——明六社の民主論——言論自由の黄金時代——福澤諭吉と加藤弘之——西南の役——民権沸騰、政府動搖——民権運動の頂點——自由黨、車界黨——歐化主義——條約改正問題——保安條例

石川三四郎

□ 維新の革命

最も著しい現象は民々主義の輸入であつた。そして其民々主義の輸入は歐化主義の結果であつた。

徳川氏の封建制度を破壊したる維新の革命を以て、單に王政復古の事業だといふのは、甚だ簡明ではあるが、歴史の事實、真相を餘りに無邪氣に單純化したものである。維新の革命は單なる政治的の革命では無かつた。社會萬般の革命であつた。殊に日本思想界の大革命であつた。社會生活の總ての方面に通貫したては、獨逸のピスマークに私淑した國家主義的歐化論者もあつ

一に歐化主義というても、其れには種々なる系統があつたに相違無い。或は佛國流の人権思想、ルソーの民約論的思想に育まれた歐化主義者もあつたらう。或は英國のミルやベンザム等の流を汲んだ功利的な自由主義者もあつたらう。更に後になつ

たらう。そして日本人が歐米諸國に渡航して彼の地の風土文物を目撃し學得して居た者の多いのは維新以前からの事である。村上英俊が江戸に來て佛蘭西語學を教へたのは嘉永年中であり、福澤諭吉の慶應義塾を開きて英學を教へ始めたのは、其校名の示すが如く慶應年間であつたらう。

私は佛國の田舎に生活して居る間に、其真家の寫真帖中に福澤諭吉や箕作秋坪などのチョン鬚頭に大小を、たば、さんだ寫真を發見して、計らずも明治文明開拓者達の渡歐當時を追想したとがある。私の居た家は碩學エリゼ・ルクリュの妹の家で其兄弟の一人は海軍士官として日本にも來たものある人なれば、或は日本で此等の寫真を手に入れたものかとも思うたが、能くく其發紙を見ると、露都器ベチルスブルダの文字がある。さすれば多分同地で撮影したものであらう。そして福澤の寫真の裏には *Japan's honor* と書き入れ、且つ日本語で姓名も記入してあつた。

□ 明六社の民主論

明治六年に起つた明六社といふ文化運動の一體社中には、森

有禮を筆頭に、福澤諭吉、加藤弘之、箕作秋坪、岡崎祥、西村茂樹、津田真道、西周、中村正直、杉亨二等の人々が加盟して居た。彼等は何れも當時最も有力なる歐洲文明の輸入者で、新日本思想界の開拓者であつた。

是より先き、明治四年、岩倉具視を全權大使とし、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文等を副使として歐米諸國に遣はした。そして其翌年此等の人々は歸朝した。思ふに彼等も亦驚異と讚美とを以て歐山米水を跋渉して來たとであらう。

併し、前にも云うた通り、同じく新歸朝であり、歐化主義者であつても、彼等は皆同系統の思想や人物や學んで來たものでは無い。又假令同系統の思想や制度を見て來ても、其地位や職分に從て其態度も異つて來る。全權大使として西洋見學に出かけた人達が、歸來廟堂にありて寧ろ實際政策に歐化主義を行はうとしたのと、明六社の連中が専ら民間にありて思想界を開拓しようとなつたのは、同じく歐化主義にもせよ、大分其態度が異つて居る。

維新前に單に佛國に居た日本人ばかりでも八百人からの多數であつたといへば、歐米全體に就いて言うたなら定めし夥しい

致に達して居たであらう。其れが多くは元氣横溢たる青年で、
 歐米から歸つて來る時には何れも祖國改革の希望と野心とに満
 ちて居たであらう。そして是等の日本人が歐米の文明に接して
 最も著しく其神經を刺激したものは實に自由平等の思想であつ
 た。明六社の一頭目たる福澤が、其著「學問のすゝめ」に於て
 開卷第一に書いた文字は「天は人の上に人を作らず、人の下に
 人を作らず」といふ一語であつた。彼が急進的革新の叫びは、
 當時の人の耳をつんざく霹靂の如くに轟いたであらう。

更に驚くべきは後の國權論者として強者の權利を主張したる
 加藤弘之の民主論であつた。彼は其明治七年の著「國體新論」中
 に曰く、(以下六號十三行削除)

彼の加藤にして既に斯の如くであつた。當時一般の社會が如
 何に自由平等の思想に酔うて居たか、分るであらう。

□ 言論自由の黄金時代

日本言論自由の史上に於て、明治六七年の頃は、實に黄金時
 代とも稱すべき時代であつた。幕府が倒れて封建制度は滅び、
 社會の總ゆる舊習慣、舊法律は悉く其力を失ひ、何れの方面に
 於ても、新思想、新施策を喜び迎へる時代であつた。之を今日
 に比すれば、當時の政治は遙かに自由で活氣に富んで居た。前
 段に紹介したる加藤弘之の民主論の如き、今日より之を見れば
 極端なる危険思想と言ふべきである。而も自由に彼の如き言論
 を擅にして憚らなかつたのは、實に當時の政治の自由であつた
 とを説明するものである。

然るに、此時に當り、日本の政府部内に一變動が起つた。其

れは征韓論に関する西郷、大久保等の衝突である。西郷隆盛や板垣退助は、議廟堂に容れられずして遂に袂を連ねて野に下つた。そして各々其故郷に歸つた。青年有爲の士にして其後を慕うて集り來るものが甚だ多かつた。西郷の結社は十年の後に於て墓なくも滅じたが、板垣を中心として集りたる土佐の青年結社は、後の政黨運動の萌芽となつた。そして其中堅とつた。

彼等は其意見に於ては實に急進的的革命論者であつた。佛國大革命に心酔した極端な民権論者であつた。歴史家は當時の土佐青年結社の事情を記して曰ふ。

『高知に三大政社あり、……立志社は則ち板垣の率ゐる所にして、社員一千餘人あり、洋學所を開き、法學所を設け、日々夜々、自由民権の説を講じ、或は佛國革命を童話に作つて市街に歌謡せしめ或は魯國新社會黨の非運を小説に作つて傳唱せしめ、以て自由民権の説を平民に知らしめんと勉めたり云々。』

□ 福澤諭吉と加藤弘之

明治六七年の頃に於ける日本の思想界は、之を佛國流の民権論、英國流の功利説、獨逸流の國權論の三派に區別するところが出來よう。板垣退助を中心とせる土佐の立志社や、後の自由黨は

實に佛國流の民権論を理想として集合したものであらう。而してルソーの民約論は彼等の經典となつて居たのである。之に對して福澤諭吉等の自由主義は、大體に於て之を民権論と稱するとも出來ようが、其思想の系統を尋ねれば、寧ろ英國流の功利主義であつた。ミルやベンザムや更らに新らしくしてはスペンサーなどの流を汲んだものであらう。

其後、獨逸流の國權論を主張したる加藤弘之は個人的功利論者の福澤諭吉に對して一論文を公けにして居る。其文中に曰く、

『先生の論は、ペ、ア、ル、ナ、リ、リ、ベ、ア、ル、ハ、決して不可なるには非ず、歐洲各國、近今世道の上進を裨補する、最も、リ、ベ、ア、ル、の功にあり、去れどもリベアールの論甚だしきに過ぐる時は、國權は遂に衰弱せざるを得ざるに至るべく、國憲遂に衰弱すれば、國家も亦た決して立つべからず、フ、ラ、ン、ツ、と云へる人の國家理論にリベアール黨とコムニスト黨との論は全く相表裏すれども共に謬れり、其故はリベアール黨は務めて國權を減縮し、務めて民権を擴張せんと欲す、故に教育の事、電車の事、郵便の事、其他總て公衆に係はれる事をも悉皆人民に委託して、決して政府をして是等の事に關せしめざるを良善となす、然るにコムニスト黨は務めて國權を擴張し、務めて民権を減縮して農工商の諸業をも悉皆國家の自ら掌るを良好となす、蓋し二黨各々國權の相分るゝ所以を知

其「コムニスト」と稱するのは、思ふにマルクスやエンゲルス等を指示したものであらう。最初急進的なる自由平等論を唱へた加藤が忽ち變じて國權論者となつたとは、随分世間の非難を買つた。變節漢として多くの人の指彈を招いだ。其加藤が自由主義にも共產主義にも反對して居る時に、自由黨の人々は其學說に於て反對なるべき共產黨の運動に對して滿腔の同情を有して居た。此處に人間の心情が鋭く表はれて居る。心情のコントラストが表はされて居る。

□ 西南の役

明治八年、所謂「大阪會議」といふものが開かれた。木戸や板垣は其結果として一度廟堂に立つに至つたが、大久保派の保守的政策は再び此二人の民政論者をして内閣を退くに至らしめた。而して國權論は漸く勢力を得て、政府萬能主義を懷抱する者が時めく様になつた。政府干渉政策、保護政策は着々政治の上に實現されるとなつた。そして政府に欺を通ずる事業家にして國庫の補助によりて巨利を私する者が漸く多くなつた。例

へば、明治八年八月、政府自ら國有の汽船十三隻を郵便汽船三菱會社に下附し、其上に年金二十五萬圓を十五年間給與し、其れにて海運の業を起さしめた如き、其最も著しきものである。

保護主義は干渉主義から起つて來るものである。干渉主義は往々にして又た專制主義に赴くものである。現に當時の政府の態度は既に其端緒を開いて居た。民間の志士や政治家は之を見て憤激した。そして反動的に益々急進的改革を鼓吹する様になつた。そして當に大いに保守的政府と激戦を試みようと思氣込んで居た。適々西郷等の西南の役は起つた。上下萬民の注意は一齊に此に向つた。若し西郷等の軍が今少しく好形勢を維持したなら、天下の形勢はドウ激變したか分らなかつたであらう。併し西郷の軍は遂に一敗地に塗れた。

西郷の軍は敗れたが、反政府の思想、民權自由の思潮は決して停止しなかつた。否其勢は恰も燎原の火の如く、日本の各地に蔓延した。そして其最も有力なる放火者は實に板垣退助であつた。一時衰へた愛國社といふ青年結社は、再び板垣を中心として興された。それは明治十一年の事であつた。次に明治十三年には之を改めて國會開設願望有志會と名づけ、更らに之を國

會期成同盟會と改稱した。翌十四年に至り、堂々たる自由の大旗を掲げて其下に團結した自由黨は實に其後身であつた。

□ 民論沸騰、政府動搖

自由民権思想の爲に祝福すべき他の事實がある。其れは佛蘭西流の自由思想に洗禮を受けて來た多くの壯年志士の出現したとである。例へば、久しく佛國巴里に留學した西園寺公望が、自由民権の急進思想を懐いて歸朝し、自ら主幹となりて東洋自由新聞を發刊したる如き、中江篤介や田中耕造等が帷を東京に垂れて佛國流の自由主義を講じたる如き、其の最も著しい事實である。

恰も此時に當りて一時大いに天下を動亂した事件が起つた。

其れは「北海道官有物拂下事件」と稱するものであつた。藩閥政府と因縁ある大阪の商人等が、當局と相結託して、既に官金千四百餘萬圓を投じて經營せる種々多數の製作物を僅かに三十萬にて而も三十個年賦にて拂下けようと企てたのである。此事が一旦及び世に傳へられると、人心は俄かに激昂し、全國到る處に政府攻撃の演説會は開かれ、民間の志士は何れの黨派に屬す

るを問はず、殆ど總起ちとなつた。天下騷亂の有様は、鼎の沸くが如くであつた。歴史家は當時の事狀を記して曰く、

「維新以來、日本全國の人民、智と無く、愚と無く、舉て政府の措置を非難せしこと、未だ此時より甚だしきは無し。」

民論沸騰は實にさまざまの有様を呈した。そして此事件は彼の國會開設論者の氣焰を大いに高調せしめた。寡頭政治の弊を舉げて、代議政治の必要を説くに最良の實例を與へた。かくて時の政府も亦之を傍觀することが出来なくなつた。十四年十月十二日、拂下指令の取消と同時に、國會開設の詔勅は發表せられた。併し自由主義の火勢は是れにて屏息するに至らなかつた。否寧ろ其猛威を高めつゝあつた。そして其飛火は遂に政府部内をも侵すに至つた。政府は頗る動搖した。進歩的思想を有つて居た大隈重信は冠を掛けて野に下り、矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄、島田三郎等十數名も亦同時に官を去り、茲に一團體を成して漸く改進黨の萌芽を發するに至つた。

大隈等の去るに及んで、政府は純然たる保守黨の内閣となつた。八氏の反感は彌々甚だしくなつた。一揆は諸方に起り、暴徒は各地に現はれた。借金黨と稱するもの、小作黨と名くると

の、到處に活動し、世は常に席旗竹槍の時代となつた。彼の長崎に於て始めて呱呱の聲を揚げた東洋社會黨の創立せられたのも實に此時であつた。

東洋社會黨の創立者等は、怖らくは、未だマルクスやエングルを讀んで居なかつたであらう。彼等は未だバクニンやクロボトキンを讀まなかつたであらう。彼等は未だ近世勞動運動の最大動機、最大要求たる資本的商業的經濟組織に深き注意を拂ふには至らなかつた。併し彼等は少くとも日本社會黨運動の先驅をなせること、恰もワイトリングやフィヒテが獨逸運動の先驅を爲し、フリーエーやサン・シモンが佛國社會運動の先驅を爲して居ると同様を観ることが出来よう。

□ 民權運動の頂點

明治十四五年の頃は、日本に於ける自由民權運動の最も隆盛を極めし時代であつた。蓋し當時歐羅巴に於ける革命運動の潮流は、滔天の勢を以て我日本の思想界を打つて來た。露國の少女ウエラ・サシユリツチがトレボフ將軍を狙撃したのも此時であつた。クロボトキンが監獄脱走も此時分であつた。ヘーゲル

が獨逸老帝の狙撃を企てたのも此時分のことであつた。ビスマークの社會黨鎮壓令を發布したのも此時分であつた。かくて幾多の暗殺、幾多の叛逆が到處に起つた。竟に亞歷山第二世弑殺の一報は世界を驚倒するに至つた。新たに自由の新空氣を呼吸した我日本の青年が、是等の壯烈な革命運動の諸報を聞睹して心身共に躍動したのは固より當然であつた。

自由民權の運動は白熱度を帯びて日本全社會の上に漲ぎつて來た。東洋社會黨が起つたのも亦此氣運に迫られたのであつた。然るに此時に頂點に登つた運動の大波浪は遍々前方に起りし障礙に衝突して一度倒潰するに至つた。其障礙の一つは國會開設の詔勅であつた。他の一つは政府の干渉政策であつた。

併し當時民間にありし自由主義進歩主義の二大政黨たる自由黨と改進黨とは、此二障礙に遭遇して必ずしも同一の影響を蒙らなかつた。即ち國會の開設を以て殆ど唯一の主義とした自由黨は、殊に多大の影響を受けたのである。自由民權一點張り、國會開設一點張りの自由黨は、其主義、思想が改進黨の如く複雜でなく、學者的でなかつた。そして極端に走り易く、急激に傾き易かつた。従て多衆を集むるに便利であつた。活潑な青年

を集むるに容易であつた。然るに國會開設の詔勅が出た。而して彼等を結束したる唯一の目標が喪はれた。彼等の熱情は徒らに激越するのみであつた。かくて自由黨は自ら支へることが出来ない様になつた。遂に自ら一篇の趣意書を遺して解黨に決したのは、實に明治十七年十月であつた。趣意書中に曰く、

『我黨は實に彼一族團が唯だ其大將あつて、各部將あらざると一般の有様を生じ、相亂れ、殆ど復た拘束すべからざるに至れり。』

政府の干渉漸く專制的となり、集會條例が出て政治運動は束縛され、新聞紙條例が出て、言論の自由は壓殺され、さなきだに血氣に急つた自由黨員等は諸方に於て過激な運動を起すに至つた。曰く、加波山事件、曰く、信州飯田事件、曰く、秩父暴動、曰く、名古屋事件、曰く、静岡事件、曰く、大阪事件、曰く、叛逆、暴動、數へ來れば其數は幾十といふ程であつた。そして是等は皆自由黨一味の人の運動であつた。

□ 自由黨、車界黨

自由黨一味のものが此の如く過激な運動を敢てする間に、改進黨の一派は常に慎重の態度を以て政治を論議して來た。蓋し

此兩黨は、各其思想の流派を別にし、其黨員の氣風を異にして居たのである。改進黨も自由主義の政黨ではあつたが、然し主として英國派の實利主義を宗旨にして、専ら學者的の態度で漸進的政策を説いた。然るに自由黨は佛國流の民權論を主旨として、常に志士の熱情を以て急進的の革命を鼓吹した。此差異は又自然に兩黨の基礎に於て大なる相違を來した。即ち改進黨は専ら中流以上の知識ある人物を集め、自由黨は専ら中流以下の正直な人物を集めた。從て自由黨に常に多く貧者の味方となり、又自分達も貧乏であつた。之に反して改進黨は富豪と結託して常に貧困と遠かつた。大隈は在閣の當時より三菱會社と結託し改進黨其ものも亦た自ら同社との因縁を繼續して自由黨員の攻撃を蒙つた。

自由黨の創立者板垣退助が明治十四年九月一日大阪戎座に於ける演説に曰く

『之を古今の歴史に觀るに、貧者は常に進取の氣風あつて、富人は多く守舊の趨向に陥ることを免れず、近く之を我維新前後の事に徴するも、愛國の志士は常に多く貧人の中より出でて、富人は却て袖手して内外の國難を傍觀したり、且つ富人は往々利己の一點に偏するものにして、其の己の爲には竟に國を賣るに至りし例も

亦之あり。」

彼は世の學者、貴族等が多數人民を來愚となして輕蔑したのを深く憤慨したのである。板垣總理の思想は斯の如くであつた。自由黨の態度は彼が如くであつた。當時自由黨員中にて學識ある青年として評判の高かつた奥宮健之等の「車界黨」こそ、同黨内に漲つて居た空氣を察するの一徵據となすことが出來よう。「東陲民權史」と稱する書中に奥宮並びに「車界黨」に關する記事があるから其一節を左に紹介して置く。

「奥宮は高知縣土佐郡布師田村の人、其父健々齋と號し、佐藤一齋の高弟たり、海南の文學多くは健々齋の薫陶に出づと云ふ、健之箕裘を繼ぎ、又英書を修む、十四年、加藤高明、小川錦吉、江南哲夫等と三菱會社に入て實業に従ふ、此夏社用を帯びて北海道に赴く、偶々、開拓使官有物拂下事件の沸騰するに會ふ。奥宮到る處論客と交通し、其京に歸るや、自由黨の組織に際す、乃ち三菱を退き、自由黨に投ず、……馬場辰猪、大石正巳、西村玄道、佐伯剛平等と相謀り、府下に國友會なる者を創設し、盛んに政談演説を開けり、……國有會の名遠近に轟く、……奥宮又以爲らく、暴吏專制の下、言論是れ虛器のみ、若かず腕力を以て彼等暴吏を討滅せんにはと、是より一切演説を斷念し、文章を拋棄し、其精神を秘密運動に傾注せり」

此に一轉して「車界黨」の事に及んで曰く、

「東京馬車鐵道の敷設せらるゝや、市内の人力車夫業を失うて想望す、奥宮之を奇貨となし、車夫數千人を神田明神山に會し、鐵道馬車廢止の同盟を結び、自ら主として鐵道馬車反對の衝に當る。」

奥宮等は其後間も無く捕はれて石川島の獄に投ぜられた。其「鐵道馬車の廢止」を企てたなどは頗る幼稚な思想ではあつたが併し彼等が常に貧者弱者の味方となつて事を舉げようとした處に興味がある。當時頻りに小作黨とか借金黨とか云ふ様な團體運動が諸方に起つたが、是等も多くは自由民權運動の勢ひに沿うて出現した所の傍系的社會波動であつた。

□ 歐化主義

前段に敘述して來た自由民權の思想と運動とは、之れを明治文化史の上より見れば、廣汎なる文化運動中の一波動と見るこゝとが出来る。抑も明治年間に行はれた一般の思想運動、政治運動、社會運動は、總て之を歐化主義といふことが出來よう。其歐化主義といふのは今日の文化主義、文化運動といふ様なものである。然るに明治史の上に於て「歐化主義」といふと、此文

字には一種特別な意味が含まれる。即ち通常「歐化主義」と言へば、明治十七八年頃より二十年前後に至る伊藤博文、井上馨等の貴族的歐化政策を指示するのである。

明治の初年から、政府を初め一般の社會が常に歐化的方針に向けて進んで来たことは事實である。然るに此時代に至りて、其歐化主義の上に更に一要素を加へるに至つた。蓋し從來の歐風模倣主義は英米の風を習ふことか、或は佛國の流を汲むものであつた。然るに當時中歐の一角に鬱勃たる精力を孕んで崛起した一民族があつた。普漏西國民是れである。普佛戦争は、普軍の勇戦に、奈翁三世の大敗に、世界の耳目を聳動したが、更に此戦争はカイザーの下に日耳曼帝國建立の準備をなした。此大帝國の名の下に、大なる野心を逞うした鐵血宰相ビスマークの美名は、世界各國の政治家が讚眞欣慕の目標となつた。東洋新進の日本に於ても、亦一人のビスマーク讚美者を缺かなかつた。明治の元勳、木戸、大久保等の後を承けて、自ら臺閣の上に雄飛しようとした伊藤博文は即ち其一人であつた。歴史家は記して曰く、

『伯(伊藤を言ふ)の歐洲を巡遊するや、立憲帝政國中、最も帝權の

強大なる獨逸帝國を以て第一の講究所と爲し、其帝都柏林に駐る久し、時恰かも獨逸大宰相ビスマーク心を東洋貿易策に傾け、其國民の汽船會社を保護し、其定期航海を獎勵し、以て英佛と東洋貿易の競争を試みんとするに際す、是を以て伯の巡遊して柏林に駐るはビスマークに取りて最上の好機會と爲りしものゝ如し、故に獨逸政府に於ては、伯の求むる所、欲する所は、勉めて能く之に應じ……伯の歸るや、憲法編纂の顧問員數名は新に獨逸より聘し、法科大學の教師は新に獨逸より聘し、陸軍の教師は新たに獨逸より聘したり、當時俚諺に曰く「彼奴も此奴も獨逸にあらざれば夜は明けぬ」……且つ條約改正の業も亦獨逸政府に於て歴然之を授く事の傾きありき。』

歐化主義が明治初年から行はれた様に、政府干渉主義も亦早くから政府部内にあつた。大久保利通は即ち其牽先者であつた。然し、其政策が最も精巧なる法律組織となつて大成されたのは伊藤内閣の時であつた。彼は法治制度なる美名の下に精微な繁雜な組織を作り、そして一方には、明治の功臣にして不平あるものを繩縛し、他方には、民間の政黨に對する干渉を便にした繁文縟禮の稱が流行し始めたのは實に此時であつた。

明治十八年伊藤等の計畫にて政府の組織を大に改革し、先づ大政官を廢して内閣を立つるや、伊藤は自ら其總理大臣となり、

井上は外務大臣となつた。そして永年の宿題であつた條約改正を斷行しようとして計り、其準備として技巧的な歐化主義を盛行させせる様になつた。史家は之を貴族的急進主義といつて居る。

□ 條約改正問題と保安條例

日本の社會、殊に上流社會が、歐風に急變しようとした當時の有様は、歴史上未曾有な勢を成して居た。而して之が爲に奢侈の風は俄かに増長した。國庫の歳出は急激に膨脹した。歴史家は當時の有様を記して次の如く言うて居る。

『我國の上流社會は儼然として百事日本の舊風を棄て、忽焉として一朝歐洲風に變ず、夫の輪奐の美を盡し、結構の麗を極めし鹿鳴館は便ち此時建築し、以て宴樂の場と爲し、晝遊、夜賭、舞踏、音樂、骨牌、棒球、物として適せざるなく、以て内外貴人の情を結ぶの便に供し、……甚だしきに至つては人種改良論を主張し、大和民族に換ふるに高加索人種を以てせんとするに至る云々。』

『就中、二十年四月二十日、伊藤伯の催せし假裝舞踏會、同廿七日井上伯の鳥居邸に於ける演劇天覽の如き、其最なるものにして人或は之を評して、未だ羅馬の盛時に至らずして先づ其弊を學ぶ

ものなりと云ふ。』

かくの如く、驕奢淫樂の風を誘うてまで僅かに成し遂げようとした條約改正の條項は、我が國權論者を見て以て殆ど賣國に近しとするものであつた。かくて明治二十年五月、勝安房の建白となり、六月ポアソナードの意見書捧呈となり、七月農商務大臣谷干城の意見書呈出、依願免官となり、遂に條約改正會議の事實を民間に傳聞される様になつた。

世論聳々政界の風雲甚だ急、自由黨の壯士は當に大いに爲すあらんとした。伊藤博文がビスマルクより傳授せられし社會黨鎮壓の實驗的秘訣は此機を外にしては試験するの時が無い。恰も此時專制主義にして強膽なる三島通庸が警視總監であつた。霹靂一聲、大鎮壓令は發布せられた。有名なる保安條例は即ちそれである。自由黨或は改進黨の別無く、苟も政府が危険人物と見做す者は悉く帝都以外に放逐されて了つた。

明治改革史上に、さしも生氣を與へて光彩を放ちたる自由民權の運動は、此「保安條例」の一撃の下に、永久に葬られることとなつた。政府は一方に極端なる壓制を行ふと同時に、他方に於て廿二年には憲法發布を行ひ、廿三年には國會の開設を實行した。此に於て我が國の官民争鬭の歴史に一轉機を劃した。即ち官民の政治争鬭は漸く議會に於て融和せらるゝに至つた。日本の自由民權史は乃ち是を以て大團圓とせねばならぬ。